

2019/07/01

関係各位

Far East Group

会長 大嶋 謙嗣

造化

～陰陽と中庸～

先月から「造化の要件」について書いているが、突き詰めれば、易経にもあるように物事は変化するのだから、なんだって造化の契機・要件となり得る。7月は、そういう柔らかさや自在性が身についてくる時期かもしれない。夏だからね w。

何が起こっても、「おお、そう来たか！」と前向きに楽しんで処していける夏を過ごせる一助になるような、今月はそんな会報でありますように w。

造化の要件・・・先月からの続き。

●本気

物事を「楽しむ」ということはとても大切。それは自分の命を生き生き伸び伸びゆったりさせて事に処することだ。論語にも「これを知る者は、これを好む者に如かず。これを好む者は、これを楽しむ者に如かず」とあるように、楽しんで取り組むことで道は伸びていく。しかし、「楽しいことなんて何もない」という泣きごとを言う人もいる。そう言う人には、この言葉を叩きつける。

「本気で生きてるか」。

例えば、己の死に際して、「人生楽しかったか」と考えて「楽しいこと」を思い出すのに苦勞するより、「本気で生きたか」「精一杯生きたか」と自らに問えばいい。楽しむことが分からないなら、本気かどうかを自分の基準に持てばいい。判断基準は、「楽しむ」一択ではない。

どんな状況でも、どんな条件でも、自分の命を精一杯生き生き伸び伸び発揮させるように取り組んだか。それを「楽しい」と言い、「本気」と言うのではないか。

ただ、未熟な「本気」は、偏った作為や極端に走りがちだから、そこは中庸を思い出して反省と修正を繰り返してその時その時の本気で取り組むしかないのだけどね。

●中庸

夏目漱石は「草枕」の冒頭で、知・情・意についてユーモアを交えて説明している。「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかく人の世は住みにくい」（理屈ばかりで生活していると、トゲトゲしくなる。人情ばかりだと周囲の意見に流されてしまう。かといって、意地を通してばかりだと人とぶつかることが多い。このように、人間社会は住みにくいものだ）。

親切に過ぎる（情に棹さす）のも、容赦がない（意地を通す）のも共に危険である。「人からして欲しいと思うことを人にもせよ」「人にして欲しくないと思うことを人にしてはならない」「目には目を（で）、歯には歯を（で）」どのルールも相手による差異を考慮していない点で、単独でいつでもどこでも適用させることは難しい。人に優しくあることは大切であるが、常にどんな相手にもそうあるならば、そこにつけこんでくる敵の餌食となる。逆に、人を信頼することなくいつもこちらが先に裏切れば、人との繋がりは失われ孤独になっていく。結局、そういった極端に走るのではなく、中庸（その時その時のベスト）が、自他を活かしながら伸びゆく態度となる。

自分はお人好しに過ぎるだろうか？それとも無慈悲な暴虐に過ぎるところがあるだろうか？どちらも危険だと中庸は教えてくれている。

親切にすべき時は親切に。しかし、降りかかる火の粉は払う。時にはその火元を徹底的に消化することも必要となる。中庸とは、足りない時には補い、過多の時には省いて、自ら望む方向へとバランスをとっていくことである。尺取虫を見てみればいい。前に進むには身体を伸ばすことが必要である。そして、伸びたら縮む。伸びっぱなしでは、それ以上先へは進めない。歩くには左足を出した後は右足を出す。どちらか片方だけを出すだけでは前に進まない。中庸とは、固定されないものであり、明確なものである。固定したもの、曖昧なもの、中途半端なものとは全く異なる。その時その時に応じて、仁義を体現していく態度こそが中庸である。

●陰陽

陰と陽は別々のものではない。一つ（太極）のものに、陰の側面と陽の側面があるという考え方である。それはあらゆるものに置き換えることができる。自然という一（太極）を陰陽に分けると、天（陽）と地（陰）であり、天候を太極とすれば、晴れば陽、雨なら陰となる。人間の身体という一（太極）を陰陽に分けると、背面（陽）と正面（陰）である。手を太極とするなら、甲（陽）と掌（陰）である。心も正（陽）邪（陰）があり、性格も長所（陽）短所（陰）がある。

こうして陽と陰をそれぞれ集めて陽グループと陰グループを作ってみても、それぞれの横の繋がりに関連性はない。つまり、善を陽、悪を陰とし、夏を陽、冬を陰としても、夏が善で冬が悪ということにはならない。

●陰陽の転化（変化）

陰陽は転化・変化する。例えば母子の場合、性別で見れば子が陽で母が陰。長幼で見れば、母が陽で子は陰。養育の面から見れば育つ子が陽で育てる母は陰。ひとつのものを陰陽に判断するにしても、どのような視点から見るかによって変化する。陰陽は固定して決まっているものではなく、変幻自在なものであり、明らかなもの。便宜上、ひとつの対象を一つの状況から見て陰だ陽だと言っているに過ぎない。

そして、陰陽は常に対立し合いながら、一対となって作用する。その作用から次の変化が生まれる。吐く（陽）があつて、吸う（陰）がある。それが一対となって「呼吸」となり生体維持へと作用する。静があつて動がある。夜があつて昼がある。冬は春から夏へと向かい、夏は秋からまた冬へと向かう。それぞれの季節は転化・変化して、万物に作用し季節を巡らせる。

また、陰陽は転化し変化して循環してだけでなく、お互いが相俟ち、交じり合い、混ざり合うことで新たなものへと変化・成長していく（中）。大自然は太陽の日差しや熱、雨を大地に注ぎ、大地はそれをすべて受け止め包容して、万物を生成化育させる。男女が交わって新たな生命が誕生し、その生命を繋いでいく。心は陰陽正邪の葛藤や、嬉しいことや悲しいこと等、様々な経験を経て成長していく。

●陰陽を文武両道に敷衍してみたい。

文武とは別のものであつて、別のものではない。元来、文武は一つの誠（太極）である。武のない文は花が咲いて実がないようなものであり、文のない武は実はあるが味わいがないようなものである。文武も陰陽であり、文武は相俟って中（一段上に発展成長）する。

文を伸ばす時は武がそれを支え、武を伸ばす時は文がそれを支える。左右の足を交互に出して身体を前に進めるように、文武がそれぞれに応じて転化し、役割を全うしながら協力しながら進む。それぞれの道が伸びれば、行き着くところは同じ（造化）である。文の道を伸ばしていくには武の支えが不可欠であり、武の道を伸ばしていくにも文の支えが不可欠である。親和協力してそれぞれの道が造化（自己の実現、自他の共栄）へと伸びていくのである。

先哲が教えるように、「文」とは天下国家を治め、民が榮えて国が富み、五倫（君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信）の道に外れないことである。「武」とは、天命や性、才覚を知らずに文の道に背く者を罰し、あるいは軍を起こし、あるいは謀をして天下を一統に納め、あるいは私利私欲の争いを止めて平和を築いていくことである。

従って、「武道」とは、文道を押し広めていくためのものであり、「文道」とは武道を自他の共栄へと用いるためのものである。思想（文道）と行動（武道）の一致が大切。それゆえ、文武は一体である。ふたつに分かれては進化しない。仁義礼智信、孝悌、忠信の道も「文道」である。その障害を振り払うのは「武道」である。

文は仁道、武は義道と言い換えてもいい。仁義は人間の性の一徳であつて、別々のものではない。従って、仁に背く文道は偽物・非道であり、義に背く武道も偽物・非道である。

また、文武それぞれに本末がある。仁は文の徳であり、従って文芸の根本である。文

学礼楽書数等は、芸であって文徳の枝葉である。仁を深め、文芸の枝葉を伸ばしていくことが肝要である。義は武の徳にして武芸の根本である。義を深め、武芸を伸ばしていくことである。兵法剣弓刀剛柔等の枝葉の芸は第二として習い覚え、文武合一であって初めて物事は通ることを忘れてはならない。

武に文があり、文に武がある。仁義を根本としてその上に文芸武芸を習い、本末を兼備することが肝要である。事上練磨（日常から乖離することなく、学び、習い、慣れること）を通して造化の道を体現していく、これが文武両道である。

造化には思想と行動の一致が大切である。たとえ、能力があっても、それを臆して使わないという態度は男らしくない。能ある鷹が爪を隠すというのは、臆しているわけではなく、時中を見極めているだけである。

男は己のためにのみ生きているわけではない。機会を逃したり、臆したりしては、己の名が廃ってしまう。止まるべき時は止まり、為すべき時は為す。

今年も暑い夏になりそうだけど、今月も健康と健闘を！

そして、節度をもってキビキビ生き生き伸び伸びと！